第四地区の「長野市景観賞」受賞建築物等

長野市景観賞は、長野市の景観を守り育てる条例に基づき、優れた景観の形成に貢献していると認める建築物等について表彰するもので、第四地区は数多くの受賞建築物があります。今回は、その中の一部を紹介します。

八十二銀行研修所（妻科）
平成26年（2014年）受賞
旧研修所の老朽化を受け、八十二銀行82周年記念事業で平成26年4月に完成した。

すき亭と洗心亭（妻科）
平成24年（2012年）受賞
昭和47年に開店。旭山の麓で純和風造りの建物で、県内外から多くのファンを集める牛肉料理専門店。

井上醸造（妻科）
平成18年（2006年）受賞
樹齢500年を超えるケヤキの大木と築160年の母屋と仕事場を持つ天然醸造の信州味噌店。

信濃毎日新聞（南県町）
平成18年（2006年）受賞

北野文芸座（西後町）
平成6年（1996年）受賞

北野建設本社ビル（県町）
平成5年（1993年）受賞

山と川に育まれた“長野県の中枢『第四地区』”の歴史と見どころ

【寄稿：長野県郷土史研究会青年部長　小林　竜太郎】

諏訪町、西後町、県町、南県町、妻科、新田町の6町から成る長野市第四地区を山と川というテーマから紹介します。

新田町交差点から見た旭山
第四地区で山から最も遠い中央通りからもはっきり見えます

善光寺の表参道（中央通り）が東を通り、近代になると県庁のある「長野県の中枢」になった第四地区は、江戸時代は妻科村の一部で、山と川に育まれた地です。現在の私たちの生活では、第四地区は市街地化しています。裾花川が片隅を流れているだけに感じられるかもしれません。でも、山と川にそ、この地の文化を育んできたのです。

第四地区の隣りに大きくそびえ立つ旭山は、江戸時代、大峰山とともに「善光寺のお花山」と呼ばれました。妻科村は松代藩領でした。その東手前にある、こんもりとした山は大黒山（だいこくやま）で、南県町にある大国主神社付近までの一帯はもともと「大黒（だいこく）」と呼ばれていました。平地も山とつながった地ととらえられてきた証です。

南県町の大国主神社前。旭山手前中腹のこんもりした部分が大黒山

旭山と大黒山の下を流れるのが、鬼無里方面から流れてくる裾花川です。現在は県庁の西で南に一直線に南下していますが、江戸時代の初め頃（17世紀初め）に改修されるまでは、そのまま平野部を西へ、だいたい今の昭和通りあたりを流れていました。裾花川の跡には新田が開発されました。新田町という名前はそれに由来しています。新田町交差点付近は戦後、長きにわたって長野市の商業の中枢になりました。

県庁の近くを流れる裾花川。白岩のこの付近はかつて子どもたちの川遊びの場でした

新田町の中央通り、はんこ屋小路入口にある高低差。高低差は裾花川の自然堤防の名残

裾花川の痕跡は、随所に確認できます。昭和通りより南の新田町には、やや段差の高い地帯が広がります。「高畑」と呼ばれるこの地は、裾花川の自然堤防の名残と考えられます。

裾花川から分かれて、この第四地区を流れるのが、鐘鋳（かない）川、中沢堰（せき）、八幡（はちまん）川などの川です。県庁の南の大口分水で古川、漆田（うるしだ）川と分かれた八幡川は、信濃毎日新聞社の南側で、北八幡川と南八幡川に分かれます。これらの川がかつて水田地帯であった第四地区を潤してきました。

県庁の脇でいくつもの川が分かれる大口分水。水神様がまつられています

信濃毎日新聞社南で八幡川は北八幡川と南八幡川とに分かれます（南県町）

鐘鋳川から南（左）に分かれる中沢堰（妻科）

裾花川のたもとにあった文化が鉱泉・温泉です。裾花川が旭山の北でぐっと南へ回り込む妻科の地を龍宮淵（りゅうぐうぶち）と言います。この付近には江戸時代から昭和40年代まで龍宮淵鉱泉（龍宮温泉）がありました。平成14年（2002年）にオープンした裾花峡温泉元湯うるおい館（妻科）は、地中深くから掘削した新しい温泉とはいえ、裾花川たもとの温泉は、龍宮淵鉱泉を受け継いだ江戸時代からの文化と捉えることができます。

アルプス温泉
（新田町）

この道路の下を南八幡川が流れている。

亀の湯
（諏訪町）

この道路下を鐘鋳川が流れている。

都市の川沿いに発達したのが、銭湯です。下水道のない時代、銭湯の立地として川沿いであることは重要でした。かつてはいくつも銭湯がありましたが、現在まで残ったのが、江戸末期の創業と伝えられる「アルプス温泉」（新田町）、大正時代創業の「亀の湯」（諏訪町）です。長野市中心市街地に残る銭湯は、現在この2軒だけになりました。今も銭湯があるのは第四地区の特徴です。

第四地区ゆかりの著名人を紹介しましょう。

詩人の田中冬二（1894～1980）は、第三銀行長野支店（西後町）次長として昭和14年（1939）に長野市に赴任。3年程、妻科神社西の高台に住み、「美しき燈火の町」「妻科の家」という自然豊かな町の暮らしを描いたエッセイを発表しました。第三銀行はその後、富士銀行となり、現在その跡は介護施設となっています。

左　田中冬二宅跡に立つ標柱（妻科）

作曲家の草川信（1893～1948）は、県町で生まれ育ちました。現在のひまわり公園南の住宅地です。「どこかで春が」「みどりのそよ風」など数多くの童謡の作曲をしています。中でも「夕焼小焼」は有名で、草川信が聞いたとされる山のお寺の鐘にちなみ、旭山の阿弥陀寺、西長野の往生寺に詩碑があります。

県歌「信濃の国」を作詞した松本出身の浅井洌（1849～1938）、作曲した東京出身の北村季晴（1872～1931）は、明治33年（1900）頃、妻科神社東の鐘鋳川沿いに隣り合って住んでいました。山と川など、自然豊かな信濃の情景を伝える歌は、この地から生み出されました。

田中冬二は、「美しき燈火の町」「妻科の家」にこう書いています。

「長野は仏の町である。山の傾斜にあって坂の多い町である。辻々から山の見える町である。ものしずかな町である。そして燈火のうつくしい町である。」「妻科のその家は、静かな夜更けに裾花川の瀬音がきこえた。」

第四地区6町（諏訪町、西後町、県町、南県町、妻科、新田町）の見どころ

ここからは第四地区の見どころをご紹介します

鳴子清水と鳴子大神（諏訪町）

市立長野図書館（長門町）の南側の鐘鋳川通り（通称「官庁通り」）に面した諏訪町の一角に「鳴子清水」と「鳴子大神」がある。この鳴子清水は善光寺七清水の一つとして古くから知られ、かつては澄んだ清水が枯れることなく湧き出していた。昭和30年頃までは近隣の人々の生活用水として利用されていたが、清水の脇を走る自動車の粉じんが流れ込むなどして汚染が進み、現在は清水に蓋が被せられている。

昭和38年（1963年）、鳴子清水沿いの鐘鋳川が暗渠化され、並行する道路が広くなって鐘鋳川通りが整備されたのを機に、地元の人々によって清水の隣りに「鳴子大神」が建立された。交通事故防止を願って道祖神を、鳴子清水の水霊を水神とし、子供の成長を祈って文殊菩薩と合わせて3つの神様をお祀りする大神として、毎年9月23日に例大祭を行っている。

十念寺・秋葉神社（西後町）

建久8年（1197年）、善光寺法要に参列していた源頼朝公に善光寺如来が表れて「南無阿弥陀仏」と十辺の念仏をとなえたことに由来して寺を建立したことから「紫雲山、頼朝院、十念寺」と号する寺で、境内には善光寺七福神の一つである福禄寿を祀る秋葉神社もある。毎年8月23日に秋祭りが行われている。

上後町道祖神（西後町）

東後町・西後町上の守り神。北野文芸座と南隣の「島桂本店」に挟まれた間口1mほどの目を凝らしていないと通り過ぎてしまいそうな小さな道祖神。川（中澤堰）の上にある珍しい神社で、正式な神社としては日本で最も小さな神社とされる。伽藍部分の「瓢箪から駒」の彫刻が有名。毎年8月18日宵山、19日本祭が開かれる。社の下を川が流れている珍しい神社でもある。

←写真ではわからないが、この社の下を川が流れている

北野文芸座（西後町）

北野文芸座は日本伝統芸能の振興と地域文化の昂揚を願い、県町に本社がある北野建設によって平成4年（1994年）に善光寺の表参道に建築された。

東京の歌舞伎座風の外観に、日本瓦を使用した大屋根、そして、曲線が美しい「唐破風」と呼ばれる、銅板葺きの屋根を備えている。尾上梅幸丈の貴重な助言を得て完成した。客席は大劇場に比べると小規模な385席のため、演者の息吹が感じられる程。伝統芸能のみならず、音楽や各種公演が開催されている。

長野県初の通信施設跡（西後町）

長野県の電話交換業務は明治29年（1897年）に西後町のこの場所で開始された。現在は「NTT後町北ビル」。ビルの東端に「長野県の電話交換業務開始の地」の碑がある。

ビルに向かって右手に碑が建っている

「長野県の電話交換業務開始の地」の碑

仲町稲荷神社（西後町）

朝日八十二ビルの西側の立体駐車場（西後町駐車場）の脇にひっそりと佇むのが仲町通り（犀北館ホテルから中央通りまでの通り）の守り神とされる仲町稲荷神社。毎年8月18日宵山、19日本祭が開かれる。

この仲町通りに面した現在の長野税務署の場所は、昭和42年（1967年）までの間、川中島自動車（現アルピコバス）の全ての路線が発着していた長野市の交通の要所だった。

（仲町通り）

長野県立大学後町キャンパスと
弥栄神社祇園祭屋台倉庫（西後町）

平成23年（2013年）に第四地区内唯一の小中学校だった後町小学校が閉校され、寂しい状態が続いていたが、地区住民の強い要望もあり、平成30年（2018年）4月に長野県立大学が開学し、後町小学校の跡地には後町キャンパスができることになった。後町キャンパスには県立大の1年生が全員入寮する「象山（ぞうざん）寮」も併設され、第四地区には若者が一気に増えることになった。後町キャンパス内には地域住民の避難場所、投票所、スポーツなどの用途の「後町ホール」も同時にでき、ホール東側の一部には弥栄（やさか）神社の祇園祭で使用される屋台を、組み立てたまま保管できる屋台倉庫も併設される。

ここが学生を含めた若人と、第四地区の住民との交流の場となることに期待したい。

写真上：長野県立大学学生寮「象山寮」
写真下：後町ホール併設の屋台倉庫

写真上：象山寮南棟
写真下：後町ホールと併設の屋台倉庫

撮影
平成29年
12月

だいよんちくミニ情報①

「西後町」の地名の由来は、鎌倉時代に後庁（国衙《重要な施設を集めた都市域の中心となる政務機関の役所群》）が置かれていたことに因みます。「後町」はいわば長野市の最も古い中心地とも言える町なのです。

だいよんちくミニ情報②

新田町のもんぜんぷら座のある「新田交差点」は県下では初めて、 全国でも熊本市の子飼（こがい）交差点に次いで2番目に早くスクランブル方式を取り入れた交差点です。

西山街道入口（新田町）

長野市街地の西部一帯のことを「西山地方」と言う。かつて、この西山地方から善光寺詣でなどで、現在の長野市に来るには、西山街道といわれる道を利用した。現在の中央通りの新田交差点のやや北側の横田屋提灯店の脇を西に入る道が西山街道の始終点だった。左の写真奥方向（西方）に街道が伸び、現在の相生橋付近で裾花川を渡って、七二会、小川、中条方面のいわゆる「西山」に通じていた。現在は、新田町が中心となって中央通りから100mほどの区間を石畳化するなどして、この西山街道の記憶を後世にまで残そうとする活動を行っている。

大国主神社（南県町）

鎌倉時代頃、県庁付近から西側の山（大黒山）にかけての地域を大黒といった。この頃、後町に信濃国庁があり、守護の要害が大黒山にあったため、大黒山から後町に通じる道端に大国主大神を祭神とする大国主神社が建立されたのでは、とされている。昭和通りが開通した昭和10年（1935年）に、今の通りの南側に移され、南県町の産土神となった。毎年4月15日に春祭、8月20日には秋祭が行われている。また、ここには善光寺七福神のひとつである「大黒様」が安置され、善光寺七福神巡りをする人が後を絶たない。

だいよんちくミニ情報③

南県町にある「長野中央郵便局」は、昭和40年（1965年）までは西後町の現「北野カルチュアルセンター」の場所で業務をしていました。現在地に旧庁舎の2倍以上の面積の新庁舎を新築し、第四地区内の西後町から南県町へ移動しました。

長野県知事公舎（県町）

明治20年（1879年）に長野県会議事堂（当時は「議事院」）が現在の長野県議会議員会館の場所に新設され、それから約30年後の大正2年（1913年）に県庁が現在の妻科の場所に落成されたのを機に、現在の県町に県知事公舎が新築された。この県知事公舎は当時としては珍しい洋風と和風建築が混在したものだったため、老朽化によって取り壊しが決定した平成15年（2003年）、第39～44代長野県知事だった西沢権一郎氏（現在の阿部守一知事は53、54代在職中）の出身地である上水内郡小川村に移築復元され、現在は郷土資料館として常設展示されている。

今の県知事が公舎としているのは、かつては副知事公舎だったもので、知事公舎はこの旧副知事公舎の南東側にあったが、現在は来庁者用の駐車場となっている。

旅館・ホテル・商店・銭湯が多かった町（県町・南県町・諏訪町）

県町通り

犀北館ホテル

明治20年（1879年）に長野県会議事堂が、大正2年（1913年）には県庁が妻科に移転し、現在の第四地区は長野県の政治的中枢地となった。このため、多くの官公庁・各業界の会館・企業の支社・中小の事業所などが県町を中心に開設された。

長野県は南北に長いため、県議会議員は議会開会中、付近に宿泊する必要があったため、県町には多くの旅館ができることとなった。明治41年（1909年）に犀北館（現「犀北館ホテル」）が県町に開業し、その後、犀北館を含めて3軒の旅館が開業した。当時の県町の商店数は8軒で、そのうちの3軒が旅館だった。現在も県町には犀北館をはじめ、「ホテル国際21」、「臼井館」と狭い町内に、今でも3軒の宿泊施設があり、昭和9年（1934年）9月5日付の長野新聞が県町のことを、「宿屋の多いことも街の誇り」と記している。

一方、南県町は県庁の妻科移転と県会議事堂の完成とともに官公庁、企業の本支店が続々と第四地区内にできたのをきっかけに、明治41年(1908年)には2軒だった商店の数が、大正15年(1926年)には24軒に増え、この時期に急速に発展した。

信濃毎日新聞本社
(南県町)

諏訪町は鐘鋳川に沿った町で、水利がよく、銭湯業者(公衆浴場)が多い町だった。大正時代には諏訪町に「梅ノ湯」、「八代鉱泉」、「柳ノ湯」の3軒もの銭湯があった。現在も諏訪町の「亀の湯」、新田町の「アルプス温泉」の2軒の銭湯と、源泉かけ流しの日帰り温泉入浴施設の「うるおい館」が妻科で営業をしているように、お風呂と温泉の地区でもある。

(旧市街地では第四地区の3軒と柳町の1軒の計4軒の入浴施設が営業中)

ホテル国際21
(県　町)

北野建設㈱本社
(県　町)

アルプス温泉
(新田町)

亀の湯
(諏訪町)

臼井館
(県　町)

うるおい館
(妻　科)

だいよんちくミニ情報④

古い町名順位(記録に残る町名初出の順位)

1　位　西後町【嘉歴4年(1329年)】
2　位　妻　科【慶長7年(1602年)】
3　位　新田町【天保6年(1873年)】
4　位　諏訪町【明治11年(1878年)】
5　位　県　町【明治12年(1879年)】
6　位　南県町【明治31年(1898年)】

つましなじんじゃ
妻科神社（妻科）

（延喜式内社）　御神紋は「梶の葉」
ご祭神　八坂刀売命（ヤサカトメノ ミコト ・ 諏訪社の御妃神）
ご配祀　健御名方命（タケミナカタノ ミコト ・ 諏訪社の御祭神）

妻科神社の創始年代は明らかではないが、国史「三代実録」の貞観二年（860）の条に妻科神社は、正六位の神階から従五位の下に上げられ、貞観五年には更に従五位の上を授けられる程の立派な神社として存在していた。

鳥居の支えの柱が4本の「四脚鳥居」 の左には「延喜式内　妻科神社社碑」と 「狛犬（高麗犬ともいう）」が鎮座し、鳥居をくぐった正面に「妻科神社社殿（唐様向拝付入母屋造り）」がある。手前から「拝殿」、「祝詞殿」と続く。拝殿の左手には「新撰所」の建物が、正面拝殿の上段（上の原）に「本殿」がある。

水内郡九社の神々が、叙位がないのに妻科の神が二度におよんで神階の叙位を授かった事は、余程顕著な神として国が認めていたと思われ、おそらく妻科の地が早くから拓け、かなり有力な豪族がいた事がうかがえる。

妻科神社は、善光寺の守護神である善光寺七社（湯福・加茂・木留・美和・武井・柳原神社）の一社でもあり、また戸隠神社の守り神である戸隠三所権現（湯福・武井神社）の一社と称され、中央通り西側の大門町、栄町から長野駅の在る末広町まで、十六ヶ町の氏子をはじめ多くの人々に崇敬され、現在に至っている。

拝殿の北側の一段高くなったところ（上の原）に本殿がある。

秋季例大祭

（毎年10月1日宵祭り、10月2日本祭り）

遠い先祖より人々は神のお加護を願い、生活習慣の中にも神事は連綿と継承されてきた。このため、妻科区においては宮元としての立場から「氏子総代会」や「祭事委員会」及び「煙火班」を設け、献身的に行事の維持にあたってきた。

毎年、10月1日の宵祭りには多くの方が集まり、伝統ある森花火（境内の樹木を使った仕掛花火）に歓声があがる。

（写真上）神楽が神社参入の際に、打ち上がる花火

（写真右）氏子16ヶ中で最大の「新田町」の神輿（みこし）は鳥居の下は、かついで通れず、肩からおろして通過する。

（写真左）妻科神楽保存会の神楽と獅子舞の奉納

（写真左右）境内で行われる仕掛け花火の数々

妻科神社の祭礼

【１月 】歳旦祭　1月1日　【４月 】祈年祭　4月15日
【７月 】虫送祭　7月22日【８月 】風鎮祭　8月30日
【１０月】秋季例大祭(宵祭り)10月1日 (本祭り)10月2日
【１１月】新穀感謝祭 11月23日
【１２月】師走大晦日大祓 12月30日　越年祭 12月31日
【御柱祭】6年に1回、申年と寅年に妻科、武井、湯福、水内大社の6社で持ち回りで挙行される。妻科神社では11年後の平成36年(2028年)に行われる予定。

妻科神社の末社、摂社

天神社

妻科神社の境内にある菅原道真を祀る学問の神様。

水神社

第四地区の最も西端の裾花河畔にあり、善光寺平を水害から守る。

養蚕社

かつては養蚕の神様として崇められていたが、現在は食べ物の神様として信仰されている。

聖徳社

聖徳太子を祀る。時々職人さんが参拝している。弥栄神社の御祭礼の神様が降臨する場としても有名。